

聖書：創世記 11：10～32

説教題：セムからテラ、アブラムへ

日時：2023年6月11日（朝拝）

今日の箇所を理解するには直前の箇所を良く頭に入れることが大切かと思えます。前回、創世記 11：1～9 でバベルの塔の記事を読みました。神は人の心に思い図ることがいつも悪に傾くのをご覧になり、大洪水によって地をさばかれましたが、それでこの世界は良い状態に変わったかと言えば、そうではありませんでした。人々は一つに集まって神に逆らおうとしました。今や優れた技術を持つ我々に、神など不要である。我々が天に上り、神に取って代わる存在になろう！と企てました。これを見て神は人々の言葉が通じないようにし、人々は世界各地に散らされることとなりました。さてもし私たちが神の立場にあつたら、このような人間を見てどうするでしょう。洪水では地をさばかないと約束したものの、では次は何によって地をさばいたら良いかなどと考え始めるところではないでしょうか。しかし今日の箇所に記されているのは、このような人間の罪の現実を目の前にしながら、その人間の救いのために働きを進める主なる神のお姿です。神は創世記 3 章 15 節でいわゆる原始福音、最初の福音を与えてくださいました。やがて女から生まれる一人の子孫を通して罪に堕ちた人間を救うと約束くださいました。その約束はアダムからセツ、そしてノアを通して、セムに受け継がれて来ました。それに続き、神がその約束をどのように守り、果たそうとしてくださったかという記録がここにあります。実は 10 章ですすでにセムの子らについてはいくらか記されていました。10 章 21 節に「セムにも子が生まれた」と記され、特にエベルに注目するように！という書き方がされていました。そして 10 章 25 節にエベルには二人の息子が生まれ、一人はペレグ、もう一人はヨクタンであったとありました。「その時代に地が分けられた」とあるのは、この時にバベルの塔の出来事が起こり、人々が世界各地に散らされたこと、その分裂はセムの家系にも起こったことを示しているのだろつと言われます。そして 10 章ではエベルの二人の息子の内、ヨクタンの子孫のみが記されました。それに対して今日の箇所はもう一人の息子ペレグの子孫について記されています。11 章 10 節から見ますと、セムの後、アルパクシャデ、シェラフ、エベルまでは 10 章と同じです。しかし 16 節にペレグの誕生のことが記され、以後はペレグの子孫のみが記されます。そしてこちらの流れからやがてテラが誕生し、またアブラムが生まれます。このアブラム（後にアブラハムと名を変えられる）において神の救いの約束は大きく前進することとなります。つまり神は救いの約束を

忘れず、人間の罪を前にしながら、ご自身の真実をかけて着々とみわざを進めてくださったという恵みの記録がここにあることになるわけです。

この系図の特徴として二つのことが言われます。前の 5 章にも救いの約束を担う人々の系図が記されました。アダムからセツを経てノアに至る系図です。そこに出て来る人を数えると全部で 10 代になっています。そしてこの 11 章の系図も実はセムからアブラムまで 10 代となっています。ここには神がご自身の約束を覚えて、ご計画に従ってしっかり導いておられるというメッセージが隠されていると言われます。マタイの福音書冒頭の系図と同じように、ここには省略されている人たちも含まれていると考えられます。

二つ目にはっきり分かる特徴は、ここにはこれまでの系図にあったような「死」の記録がないということです。5 章のアダムからノアに至る系図には「こうして彼は死んだ」というフレーズが繰り返されました。唯一の例外は 7 代目のエノクで、彼は死を見ることなく天に引き上げられました。ここに神とともに歩む者には死後のいのちがあること、永遠のいのちがあるという希望が示されていました。一方、11 章の系図には「死んだ」という言葉が出て来ません。むしろ「〇〇は何年生きて〇〇を生んだ。そしてさらに〇〇年生きて、さらに息子たち、娘たちを生んだ」という記録の繰り返しです。もちろん彼らもみな死んだはずですが、強調されているのはいのちです。また「生めよ、増えよ」と言われた神の祝福の言葉の成就です。これはこの世は墮落した世ではあるが、神が進めておられる救い主誕生へと向かうみわざのゆえに、死に生が打ち勝つ！という希望を示すものとなっているのではないのでしょうか。バベルの塔以降の世界にも、この神の救いの約束のゆえに希望がある。神の真実な働きによって、いのちがやがて死に勝つという希望に生きることができる。そのようなメッセージが込められているように思われます。

さて 27 節以降はアブラムの父テラの話となります。次回 12 章 1 節からアブラムの生涯が本格的に記されますが、今日の残りの部分はその序に当たる部分、彼の選びの背景を提供するものとなっています。父テラはアブラムとナホルとハランを生みました。テラはどんな人だったでしょう。彼と彼の家族についてここに 4 つのことが見ることができると思います。一つ目に 28 節から彼とその家族はカルデア人のウルに住んでいたことが分かります。前回の舞台バベルよりさらに南方にある町です。ティグ

リス・ユーフラテスの河畔、メソポタミアにある町です。そしてヨシュア記 24 章 2 節を見ると、何とこのテラは「ユーフラテス川の向こうに住み、ほかの神々に仕えていた」と言われています。つまり彼は偶像礼拝者でした。選びの家系であるセムの系譜にも偶像礼拝が入り込んでいたのです。彼が拝んでいたのは、この地方で盛んな月の神だったと言われます。

彼の家族について言われている二つ目はテラの息子の内、ハランが早くに亡くなったことです。28 節に「父テラに先立って」とあります。この結果、ハランの子どもたちは孤児となったのでしょう。その一人にロトがいました。この後、テラとアブラムはカナンに向けて出発する際、ロトを連れて行きます。これはテラとアブラムは、ハランの息子ロトの世話をし、支えていたということなのでしょう。またアブラムのもう一人の兄弟ナホルの妻はミルカという人で、ハランの娘であったと 29 節にあります。こうしてハランの亡き後、痛みを覚える彼らは家族として互いに支え合い、助け合って生きていたことが伺えます。

三つ目に言われているのは、30 節にある通り、アブラムの妻サライは不妊の女で、子がいなかったことです。ハランが早くに亡くなったという痛みに加えて、地上に残っているアブラム夫婦にもこのような痛みがありました。

そして四つ目に 31 節にある通り、テラは息子アブラムと孫のロト、アブラムの妻サライを連れてカナンの地に行くために出発します。なぜこのような旅に出たのかは良く分かりません。当時、紀元前 2000 年頃は人々の大移動があった時代ようです。そのことと関係があるのかもしれませんが。あるいは他の書を見るとすでにアブラムはウルにいた時代に神からの召しがあったようです。使徒の働き 7 章 2 節にそのように書いてあります。それを受けたアブラムの促しもあってテラは旅に出ることを決めたのかもしれません。こうして彼らはウルを出発して、まずハランまでやって来ます。しかし彼らはここで止まってしまいます。31 節最後の「住んだ」という言葉は「定住する」という意味です。カナンに行くはずだったのに、ここで止まってしまった。なぜそうだったのか、このことも良く分かりません。しかしこのハランもウルと同じく、月の神を礼拝する中心地だったようです。そしてそのハランでテラは死にます。目的地に達しないままです。こうしてアブラムとサライ、甥のロトが残されました。こうした状況でアブラムは 12 章 1 節に記される召命を神から受けることになります。そ

してここから新しい展開が始まることとなるのです。

以上の記事から私たちが学ぶことは何でしょうか。二つのことを述べたいと思います。一つは今日の箇所前半から、神は罪に満ちたこの世を見捨てず、この世を救うための働きを進めてくださったということです。大洪水によって一旦悪を消し去っても、バベルの塔に見られたように罪は再び勢いを増しています。しかしそんな私たちの救いのため、神は救いの約束を果たすことに向かって今日の箇所でも働いてくださいました。そしてついにアブラムを備え、彼において神を信じる国民を作ろうとされます。また彼らを通して全世界に祝福をもたらそうとされます。そしてやがて一人の女の子孫を通して救うという約束をイエス・キリストの誕生とその働きにおいて実現してくださいます。ですから私たちは今日の箇所に見る神の真実な働きを感謝し、その神がついに送ってくださった救い主キリストにより頼みたいと思います。罪に振り回され、罪に悩む私たちです。しかし神はあきらめずに救い主を備え、約束を果たしてくださいました。私たちはその救い主にこそより頼み、その方に連なり、その方を通して罪に打ち勝ち、神の救いを受ける祝福に生きる者とされたいと思います。

もう一つ今日の箇所から学ぶことは神の準備と恵み深い導きについてです。救いの約束を担う流れはアブラムにまで到達しましたが、改めて今日の箇所を眺めてみて、果たして彼は神に用いられそうな人だったのでしょうか。私たちが神の立場にあったらアブラムのような人を選ぶのでしょうか。今日見た通り、彼の家は偶像礼拝者の家でした。またその家では息子が早く死ぬという痛みがありました。またアブラムの妻サライは不妊の女でした。そして父テラはハランまで旅したものの、そこでストップし、そこで死にました。ある意味で暗い雰囲気漂っています。このような家族からは何の良いことも出て来そうにないと思います。神に用いられるようには思われない家族です。しかし事実はこのようなアブラムが神に召され、大きな働きを担います。そしてこの光のもとで振り返る時、ここにあったことは実は神の準備によることだったと言えるのではないのでしょうか。特にここで強調されているのは、30節のサライが不妊の女で、彼女には子がいなかったと言われている部分かと思います。これはご存知の通り、この後の展開になくってはならない要素です。彼女がこうであったからこそ、この後、与えられる子孫はただ神の恵みによることがはっきり示されて行きます。そういう意味で当の本人にはそう思えなくても、これも神のより大きなご計画が現れるために神が準備されたことだったと言えるのではないのでしょうか。

私たちもこの時のアブラム家に自分を重ねて、ここにあるメッセージを受け取りたいと思います。私たちももしかすると自分の状況を見てため息をつくかもしれません。ガッカリする心があるかもしれません。周りにはもっと祝福されている人たちがたくさんいます。そんな中で自分たちはさえない。あまりうまく行っていないと感じる。しかしそれらは神の働きがこれから現れるために神が準備された状況であると考えたらどうでしょうか。神はその先にご自身の計画を持っておられるのです。ある人は「準備」と聞いても、もう自分は随分人生を歩んで来た。若い人にそういうメッセージは良いかもしれないが、いい歳になった私にはもはや関係ない。そう思うのでしょうか。しかしこの時のアブラムは次回見る 12 章 4 節にあるように 75 歳でした。何とそこまでが彼のいわば準備期間で、これから本番だと言います。モーセも同じでした。彼の場合は何と 80 歳までが準備の時で、それからが神に用いられる人生の始まりでした。とするなら私たちは勝手に自分の人生を結論付けてはならないのではないのでしょうか。今ある状況もまだ何かのための準備という側面があって、神がここから何かをなそうとしておられるということに思いを上げるべきではないのでしょうか。

苦しみや悩みの中にある時、ここに何の意味があるのかと私たちは思います。しかし後になって振り返ると、その時の状況また経験は今の私の歩みや働きのための神の備えだったと分かることが良くあるものです。神は私たち一人一人にもそのように働いてくださっています。ローマ人への手紙 8 章 32 節：「私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるのでしょうか。」神は私たちに良くしてくださらないはずがありません。今ある様々な痛みや困難な状況も、神がこれから何かをなさるための準備に相当するものととらえることができるのではないのでしょうか。アブラムは今日の箇所の時点ではまだ何も見えていません。しかしそんな彼は次の 12 章でみことばを与えられて新しい歩みへと向かって行きます。私たちも今の様々な状況も、また悩みも、神がこの後の歩みのために与えてくださっている準備に相当するものであると捉えて、引き続き神のことばに聞いて行きたいと思います。そして今ある状況のすべてを用いて神の栄光を現す人生を導いてくださる神に従い、この神を私たちの永遠の喜びとする歩みを御前にささげる者へ導かれたいと思います。